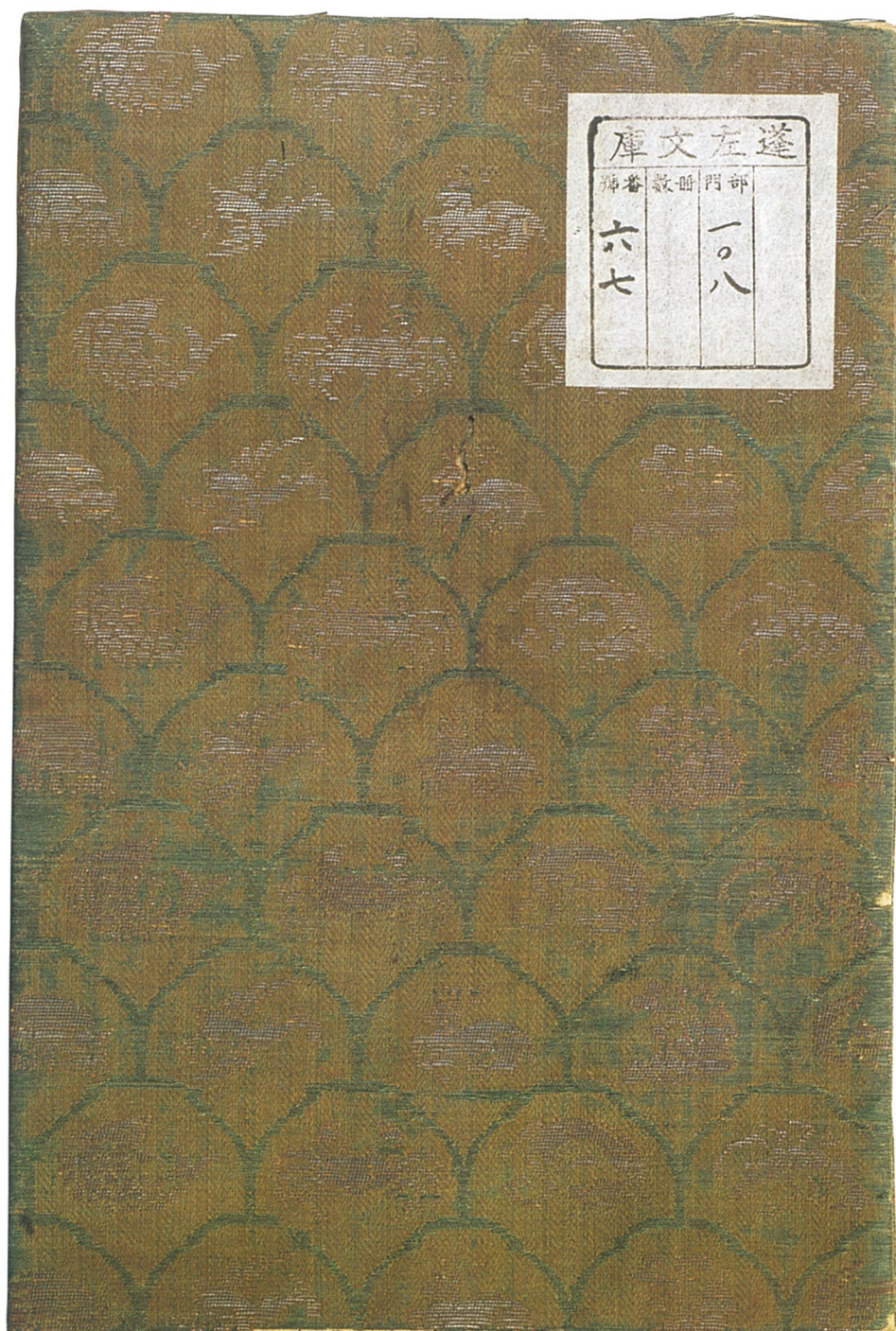


◆表紙さまざま 唐鏡（解説八ページ）



蓬左

HŌSA

No. 58

名古屋市蓬左文庫

HŌSA LIBRARY, CITY OF NAGOYA

展示室

一、中近世尾張史料 1

四月十八日～五月十三日
五月十六日～六月十四日

二、中近世尾張史料 2

七月十一日～八月十二日
八月十五日～九月十三日

◆中近世尾張史料 1

中世、とくに室町期から戦国織豊期の尾張に関する史料を、蓬左文庫の蔵書の中から紹介します。

現在の愛知県の西半分、尾張国は、肥沃な濃尾平野が広がっており、早くから大寺社や皇室・摂関家などの荘園が多くありました。また、京都と鎌倉を結ぶ鎌倉街道（東海道）が通っており、東西の水陸の交通の要衝として、政治的に重要視された地域でありました。

室町時代には、足利將軍家の一門斯波氏が尾張国の守護に任じられましたが、同氏は室町幕府の管領をしばしば勤めて、幕府内部で重んじられていました。したがって、守護斯波氏は専ら京都に居住しており、尾張国内の支配は、その家臣の守護代織田氏一族に委ねられていました。

応仁・文明の乱（一四六七～七七）によって、室町幕府、守護斯波氏ともに衰え、尾張国内支配の実権は、守護代織田氏一族に移りました。その織田氏一族も、応仁・文明の乱で東西両軍に分かれて戦ったことから、岩倉方（上半国）・清須方（下半国）

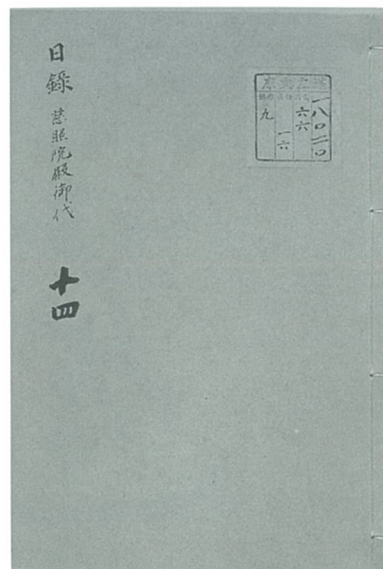
に分立し、乱後も抗争がくり返されました。そうした戦乱の続く中で、海東郡勝幡城（海部郡佐織町付近）の城主織田弾正忠家が、牛頭天王社の門前町や港町として当時富裕な津島の町を押さえ、勢力を伸ばしました。信長の父信秀の代には、愛知郡那古野城（名古屋市中区）を今川氏豊から奪って居城とし、尾張東部にも勢力を拡大しました。信秀の威勢は、清須城の守護代織田大和守家を超え、尾張国の武士たちを動員して、西三河や美濃に進攻するほどでした。

織田信秀の子、信長（一五三四～八二）は、守護代家をはじめ、敵対した織田氏一族を滅ぼし、尾張国内をほぼ統一し、一五六〇年桶狭間の戦いで、川義元を敗死させました。美濃に進出した翌年の、一五六八年には足利義昭を奉じて入京し、天下制覇への途を進みました。

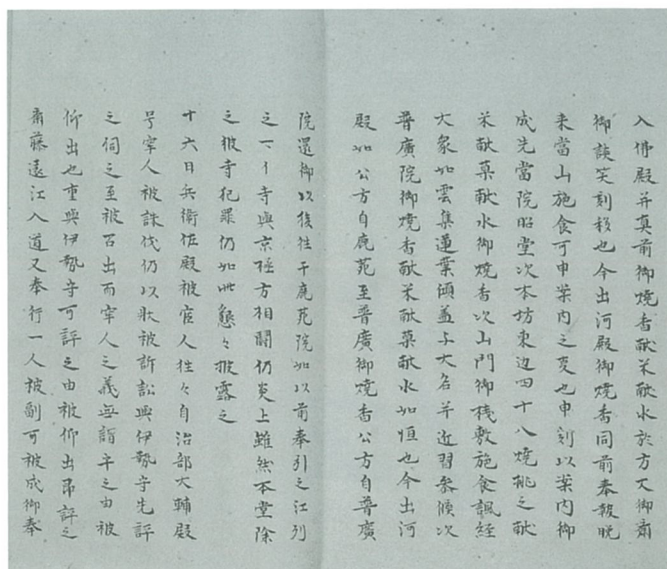
本能寺の変で織田信長が倒れたのち、尾張は信長二男信雄が領有するところとなりましたが、天下人信長の後継者となった豊臣秀吉（一五六〇～九八）により、一五九〇年に追放されました。秀吉は、尾張国を重視して、その領主には、初め甥秀次（一五六八～九五）を、秀次切腹後には、子飼の武将福島正則（一五六一～一六二四）らを起用しました。

中世では、都の公家や僧侶たちが、毎日の見聞を記録した日記が残されており、中世の尾張を理解する上で、信頼できる大変貴重な史料となっています。例えば、公家万里小路時房の『建内記』、三條西実隆の『実隆公記』、山科言継の『言継卿記』、醍醐寺三寶院門跡満濟の『満濟准后日記』などは、よく知られていると思います。

蔭涼軒日録第十四（表紙）



一四六六年（文正元年）七月一日条



三條西実隆（一四五五―一五三七）は、内大臣ま

で昇進したほか、連歌師宗祇から古今伝授を受けた
ことで知られるように、当代一流の学者でもありま
した。その日記、『実隆公記』の一五〇五年（永正
二）十月二十二日条に、名越（那古野）殿今川大夫
判官国氏についての記事が出てきます。今川国氏
は、足利將軍家の親衛隊である奉公衆に属してお
り、鎌倉後期以来愛知郡那古野を領地とする今川那
古野氏の当主でもありました。信秀によって追われ
た今川氏豊は、駿河の今川氏親の末男で、今川那古
野氏に養子として迎えられたと推定されています。

室町幕府三代將軍足利義満（一三五八―一四〇八）
が京都に造営した臨濟宗相国寺にある塔頂蔭涼軒主
が代々書き継いだ公用日記が『蔭涼軒日録』です。

蔭涼軒主は幕政の中枢に近かったので、尾張守護斯
波氏や守護代織田氏の動静についても記述していま
す。

こうした、いわば同時代人の残した記録のほかに、
のちの時代になって、まとめられた編著書にも、中
世の尾張に関する貴重な史料が残されています。も
ちろん、同時代史料と比べて、利用するに際してよ
り慎重な吟味を必要としますが、現在原文書が失わ
れてしまった文書が書写されているものなど、とく
に貴重な例といえましょう。家の系譜なども、信頼
できる旧記や伝承などに拠った、興味深い記事に出
会うことがあります。尾張藩の編さんした『士林浜
回』や、『藩士名寄』その他のなかから、今回紹
介いたします。

◆中近世尾張史料 2

一六〇〇年（慶長五）の開ヶ原の戦い、その後の
江戸幕府の強固な支配体制の確立は、国内の戦乱に
ほぼ終止符を打つことになりました。城下町をはじ
めとした都市の建設、商工業や農業などの発展は、
めざましいものがありました。尾張国内においても、
江戸幕府創設者徳川家康の四男松平忠吉（一五八三―
一六〇七）、ついで九男徳川義直（一六〇〇―一五〇）
とその子孫が領主となって、強力な支配を展開しま
した。

一六〇九年（慶長十四）に、尾張藩の新しい居城
として、名古屋城が築かれることになりました。幼
少の藩主徳川義直に代わって、父家康が命じて西国
外様大名たちに石垣工事などを分担させ、建築工事
は幕府大工頭が指揮して完成した名古屋城は、単な
る一大名の居城ではなく、西国への抑えの城として
幕府により築かれた大城郭といえます。

城の南側に広がる城下は、中央部のいわゆる「碁
盤割」を中心とした町家、その周囲を大きく取りま
く武家町、東・南端にまとまる寺町（寺社地）から
成り立っていました。これまでの清須（西春日井郡
清須町）に代わって、名古屋が、尾張国内の政治・
経済・文化の中心として発展を遂げます。

今回は、主として江戸前期の尾張に関する史料を
文庫蔵書より紹介します。

まず、尾張の大名となった松平忠吉、徳川義直の
家臣たちの分限帳を採り上げます。分限帳は家臣の
名簿と一般的に理解されていますが、江戸初期の大
名家は何よりも軍事集団としての性格が重視されて
いましたから、その分限帳も部隊編成の帳簿という

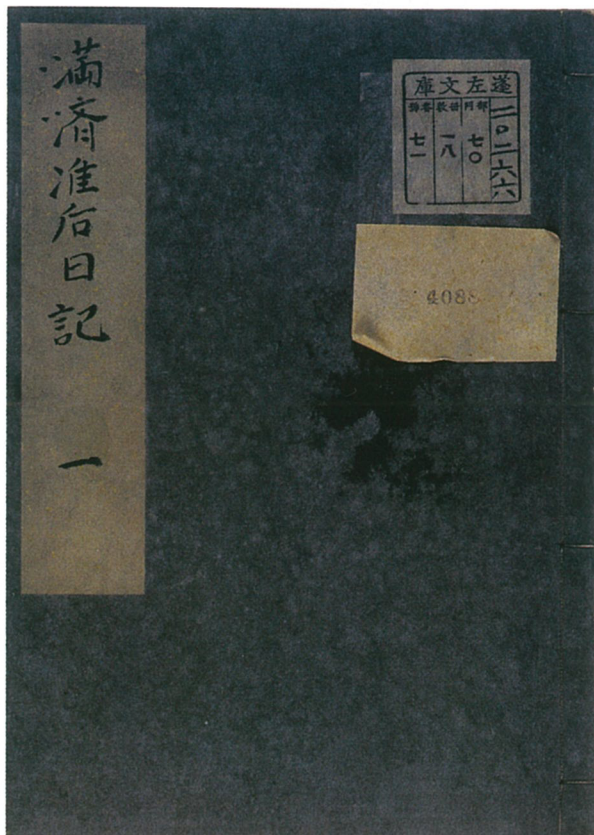
性格を持っていました。江戸初期の大名家の在り方
を考える上で、不可欠の史料といえましょう。

また、江戸前期の尾張に関する、同時代史料は意
外に少く、それらを後世にまとめた編纂書を基本史
料とせざるを得ません。『尾州旧話略』・『蓬左遷府
記稿』などが、それに当たります。現在失われてし
まった史料も含めた材料に拠って、編著述されたこ
れらの書物は、史料として利用するに当たっては予
め吟味を必要としますが、やはり大変貴重な存在と
いえましょう。

なお、名古屋（那古野）よりも古い歴史をもつ熱
田の、中近世に関する史料につきましては、本年度
後半の展示会で、ご紹介する予定です。

清須御時代御家中衆

一 武方 七千 松平石見
一 武方 八千 奥山太左衛門
一 武方 九千 奥山太左衛門
一 武方 一萬 奥山太左衛門
一 武方 一萬 奥山太左衛門
一 武方 一萬 奥山太左衛門
一 武方 一萬 奥山太左衛門
一 武方 一萬 奥山太左衛門
一 武方 一萬 奥山太左衛門
一 武方 一萬 奥山太左衛門



満濟准后日記 15冊 満濟著

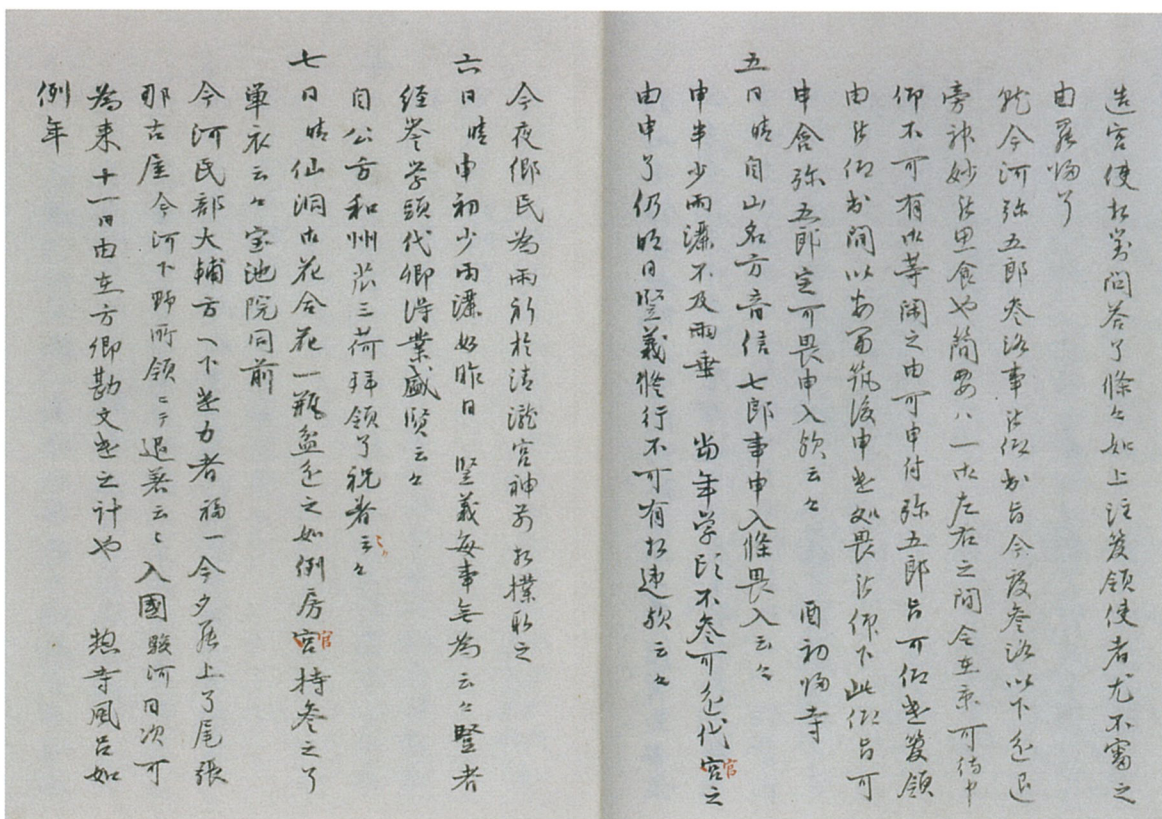
26.5×20.4cm

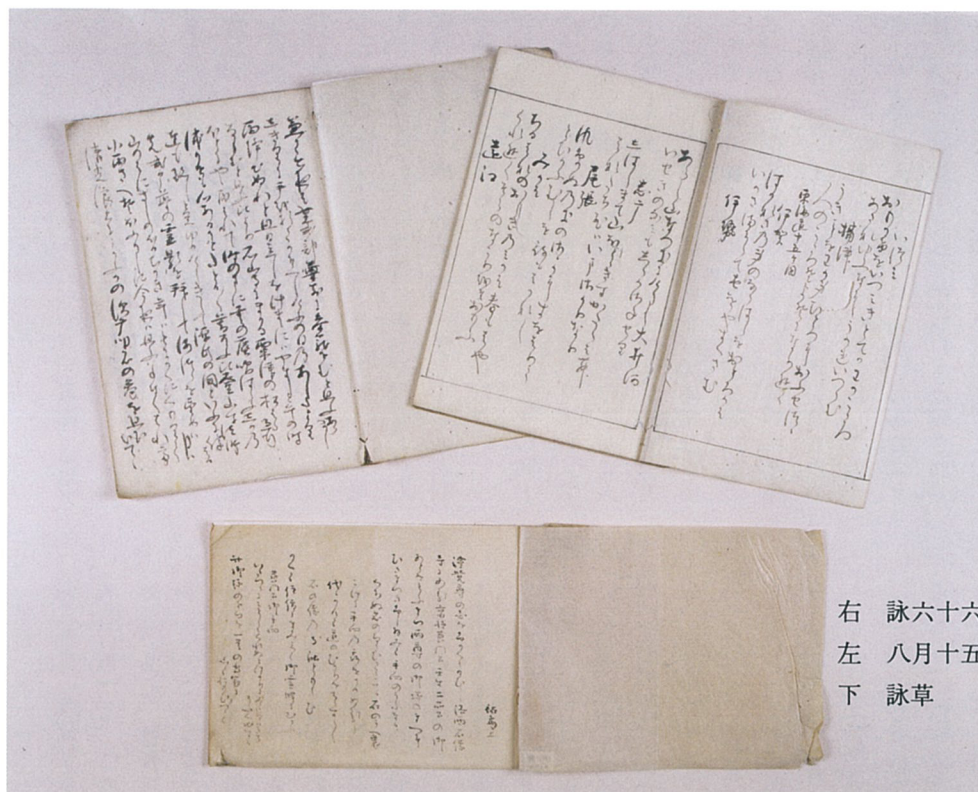
醍醐寺三宝院門跡満濟(1378~1435)は、室町幕府3代將軍足利義満の猶子となり、4代將軍義持・5代將軍義教の信任を得て、幕府管領以下の有力守護たちの意見を將軍に取次ぐ役割を負い、「黒衣の宰相」といわれた。満濟の日記『満濟准后日記』は当時の幕府政治に関する詳細かつ正確な記述がみられる。満濟自筆の原本は、1411(応永18)と13-22の11巻(国会図書館)と、23-35(応永30~永享7)の38冊(醍醐寺)があり、重要文化財に指定された。

本書は、明治期に地理局地誌課が醍醐寺本のうち、第31冊までを書写したものである。

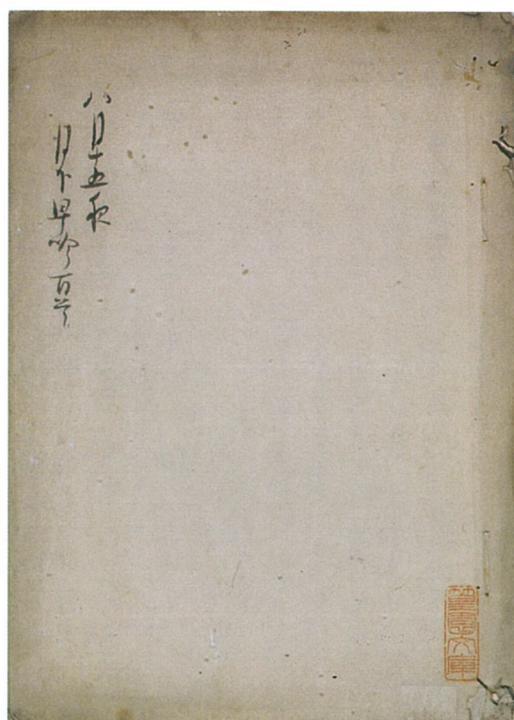
満濟准后日記 15・17

1433(永享5)7月7日の記事に、新に駿河守護に任じられた今川民部大輔範忠が京都から駿河へ赴く途次に、京都からの使者が、奉公衆今川下野守の所領尾張那古野で追いついたと記す。(下段写真)



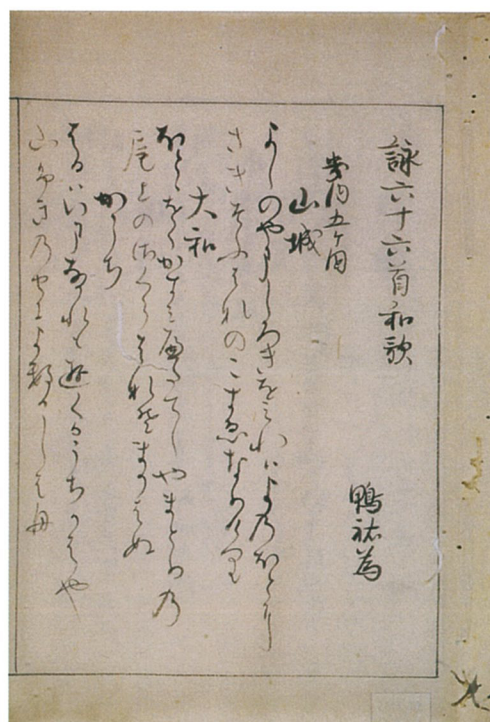


右 詠六十六首和歌
左 八月十五夜月下早吟百首
下 詠草



八月十五夜月下早吟百首 28.7×20.3cm

祐為三十代半ばの詠。早吟といい百首というのであるから、たぶん習作的な意味をもった百首であろう。いずれも「月」を題とする和歌で、奥書にあるごとく、二十余年後の寛政六年秋、清書の上師の霊前に供えたものである。



詠六十六首和歌 27.7×19.5cm

詠年不明。日本国六十六国の国名を詠み込んだ和歌。いわゆる隠題和歌(物名)である。この手法は漢詩からとられたもので、万葉集以来用いられている。江戸時代には、こういった手法の和歌を集成した『物名和歌私抄』(文化二年)もある。

蓬左文庫雜賀重良氏旧蔵書瞥見

黒田 彰子

雜賀重良氏旧蔵書の概要については『蓬左』第五七号に詳しい。その特色は膨大な近代短歌資料の系統的蒐集に認められるが、江戸期の資料もまた様々の点で注目される。

すでに『蓬左』第五七号に紹介されたように、尾張の歌人、狂歌師たちの詠作は、歌会記録等がいわば一次資料のままで残されることが多く、零細な記録類も含めて、今後検討されなければならない。

また、契沖、真淵、宣長関係の歌書は、その殆どが蒐集されている。このことは、美濃に生まれ、名古屋に居を移し、多くの門弟を指導、晩年宣長入門してその学をこの地に定着させた榛木翁田中道磨（一七二四—一七八四）の存在とも無関係ではなからう。一例をあげれば、『和歌会式』（外題内題とも。写本一冊。文化二年の跋文を有し、最終書写奥書は弘化四年）は、その跋に、「右は本居宣長翁の道麻呂大人に授けられたるむねを、おのれ（加藤磯足、筆者注）道丸大人より授りつる也」とあるごとく、宣長の説が、道磨を介して尾張にもたらされ、それをうけた加藤磯足が筆録して以後、市岡多気彦、野村正徳、尾崎敦次、三浦千春、牧重徳と書写されていった経緯を知りうるのである。蔵書中には道磨を介して宣長の門に入った者や、その影響下にあつ

たと思われる人物によって書写されたもの、あるいは所持されたことを示すものが散見する。こういった点も総合的に考察せねばならないだろう。

尾張に生い育った文学という観点から見ると、天保六年に「懈園社中」より版行された市岡猛彦の『讀酒歌百首』と、これのもとになったかと思われる写本とがある。雜賀氏の『尾三歌書年表』（昭和四八年三月）には写本のことは触れられていないから、あるいは写本は同書刊行後に氏の所蔵となったかと推考されるのである。尾張関係の歌書に限らず、雜賀氏は同一の書を写本、刊本いずれも可能な限り蒐集しようとの意図を持っておられたようで、刊本にしても、一本のみでなく、刊年の異なる版が蒐集されている。

雜賀氏は常に尾張、三河を中心とする地方文化という観点を保持して資料の蒐集につとめられたようだが、それは江戸時代に版行された歌書や関連資料の広汎な蒐集を前提としてのものであったと思しい。たとえば百人一首関係の注釈書においては『百人一首改観抄』以下、『百人一首拾穂抄』、『百人一首摘要抄』、『絵本小倉山』、『百人一首鈔』（乗阿説を伝授したとの切臨叟跋文あり。下冊のみ）、『百人一首燈』、『小倉の山踏』、『百人一首峯梯』、『百人一首抄』（石原正明）、『百人一首嵯峨の山ふみ』、『百人一首酔月抄』、『百人一首一夕話』などを収める。江戸期の歌書に範囲が限定されるものの、その範囲であたう限りの蒐集がなされている点、注目すべきであろう。

さて、雜賀氏旧蔵書の中には、いわゆる稀覯本と

言葉」（写本一冊。義正、万女の和歌をおさめる歌集。書陵部に『義正歌集』なる版本が存する由であるが、本書との関連については未考）、『幸成公御詠歌』（写本一冊）、『富士五十首』（写本一冊。文化八年より九年にいたる荒木田末寿の道中和歌。類書未見）、『南留別志拾遺』（内題「徂來先生南留別志拾遺」。写本一冊。市川鶴鳴自筆との書入あり。また、頭書形式で鶴鳴の加注あり。国書総目録等で検するに孤本か）、『校正三猿金泉秘録』（從來本の存在未確認か）、『釈教百人一首』（版本一冊。「常州稲田御禪坊」版行。類書未見）、『誠忠義士烈女銘々伝』（輯者山々亭有人、肖像一孟齋芳虎、慶応五年刊）、『和歌指南抄 全』（写本一冊。勅撰集の配列に準じて歌題を掲出し、加注。刈谷図書館、慶應大学に所蔵される版本『和歌指南』と同じものかは未考）、『尾張歌枕名所集』（内題「尾張国歌枕名所拾遺集」。写本一冊。真清田清円。校合他の書入あり。現在のところ孤本か）、『狂歌忠臣蔵』（版本一冊。元治元年序。撰者琵琶翁、画工歌川国貞、校訂百樹園。大坂心齋橋北九太郎町、河内屋喜兵衛板。狂歌書目集成に書名が見える）。これらは、今後さらなる精査を要するものであろう。

蔵書の中には、江戸期堂上歌壇の動向をうかがわせるものも多い。卷子三巻に仕立てられた烏丸宣定の詠草は、公宴和歌、聖廟法楽和歌、仙洞和歌等、数々の歌会における詠歌懷紙を継いだもので、宣定の詠のみを集めた結果になっているものの、貞享四年（一六八七）から元禄三年（一六九〇）の歌壇資料として注目されるものである。また、いずれも仮綴じの写本であるが、鴨祐為（一七四〇—一八〇一）

関係の資料が三点まとまって所蔵される。『詠六十六首和歌』（内題）、『八月十五夜月下早吟百首』（外題）、無題の三書で、六十六の国名を題とする『詠六十六首和歌』は、いわゆる名所和歌ではなく隠題和歌、首尾は以下のごとくである。

詠六十六首和歌

鴨祐為

畿内五ヶ国

山城

よしのやましろきをみればよのほとに

さきそふはなのこすゑなりけり

大和

ほと、をくかすみへたてしやまとり

尾上のさくらはなそまかはぬ

つしま

わか君の秋津しま根のゆたかなる

みよにさかゆくことのはの道

『八月十五夜月下早吟百首』は、跋文によれば、安永二年（一七七三）秋に詠んだ百首を寛政六年（一七九四）八月十五日にあらためて某（冷泉為村か）の霊前に供えたとの跋を有する。『鴨祐為詠百首和歌』『奉納』等との関係確認を進めねばならないが、貴重な資料である。外題、内題ともに欠く一冊は、仮綴じ、墨付きわずか五丁の写本であるが、冒頭以下のごとくである。（句読点は私にほどこす。）

祐為上

澄覚尊の志をふかくしのひて、洛西石像寺にある京極黄門公、壬生二品公の御あとをとふ。まつ両尊の御塚のまへにひさまつきふし拝みて、手向のうたなる

くちぬ名のならひてたてる石のうへの

こけに手向の露をかけぬる

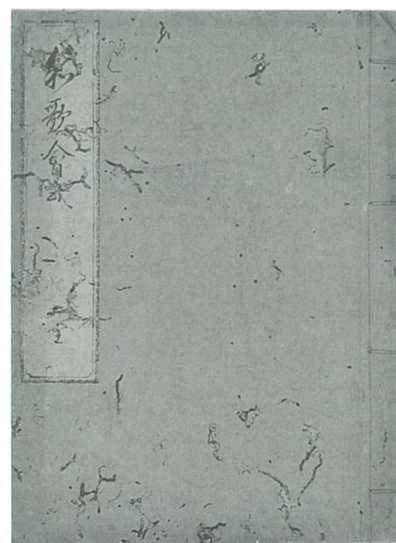
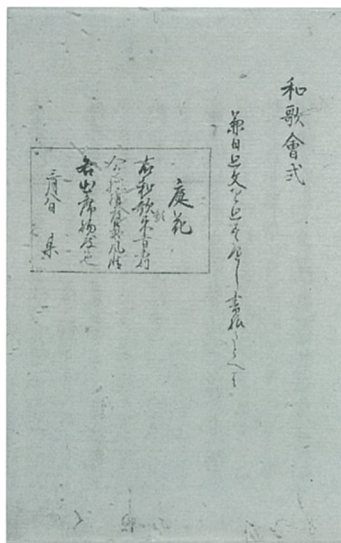
代、かけて道のひかりをてらすらし

石の像の寺のもしひ

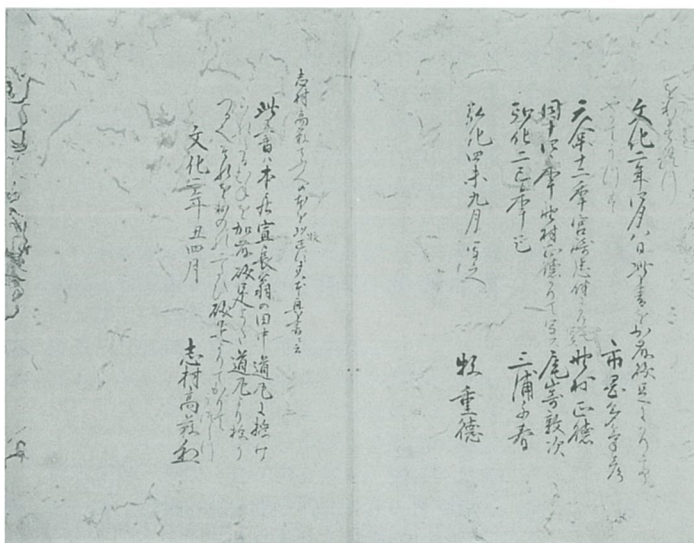
奥に十二月三日の日付を記すのみで、何時の成立とも確認できない。以上三点は、多作をいわれながらその歌歴など、十分には明かされていない祐為の活動を考える上で、看過できない資料であろう。

以上明治のものも含めると三千点に近い和装本の一端を紹介するにすぎない。明治以降の短歌資料はさらに膨大であり、すべて今後の精査をまつものである。

「和歌会式」の冒頭部分で、和歌会の開催を案内する廻文の事例が紹介されている。予め「庭花」という題（兼題）によって作歌し、当日の歌会で声に出して朗々と披露するのを披講式と称した。



和歌会式（表紙）



◆表紙さまざま (表紙口絵解説)

表紙は、朽葉色に、鱗文とカニ・エビ・魚・貝などの動物の模様を織り出した絹織物(古綴子)が用いられている。題簽はない。見返しは、金・銀箔の切金を霞形に交互に散らしている。料紙は斐紙で、鎌倉時代末に書写されたものと思われる。この綴葉装の書物に、華麗な装丁がほどこされたのは、高貴な女性の所用に供されたためであろうか。

「唐鏡」は、伝説上の伏儀氏から宋朝の始めまでの中国の歴史を、和文で物語風に記述したものである。序によれば、老沙門の著者が、九州太宰府の安楽寺に参詣して、異国の僧に会い、伏儀氏から宋朝までの中国の歴史を聞かされた。語り終わった異国僧は姿を消したが、その一部を書きとめたのが本書であるという。こうした構成は、翁世継が藤原道長の栄華を回顧する「大鏡」に始まる、「鏡物」と総称される、和文の歴史物語に共通するものである。「大鏡」、「水鏡」などで日本の歴史が語られるのに対して、「唐鏡」は中国の歴史が和文で編年的に語られている点に特色がある。

『本朝書籍目録』に「唐鏡。十巻。茂範卿抄」とあるように、著者藤原茂範(一二三六?)は、藤原氏南家の代々学問の家に育ち、自身も文章博士に補任された、当代有数の学者である。「唐鏡」の出典は、中国の正史を主に、故事伝記などを諸書で補っており、茂範の博学ぶりをうかがわせる。

元来、十巻であったが、現存するのは、巻

一「伏儀氏ヨリ殷ノ時に至ル」から、巻六「魏蜀呉ヨリ余晋恭帝ニイタル」までの六巻しかなく、残り四巻は室町期以降に失われたものと思われる。写本が数部知られている。当文庫の「唐鏡」は、巻四「漢武帝より更始(帝)にいたる」の一冊のみの端本(零本)であるが、現存最古の写本として貴重である。

本書の筆者については、二条為氏(一二二二―八六)と伝えられている。為氏は、藤原定家の孫で、歌学の家二条家の始祖となった人物である。著者藤原茂範、伝筆者二条為氏ともに、金沢文庫の創始者、金活実時と関係深い人物であるとの指摘があり、興味深い。



唐鏡 巻四 1冊
鎌倉時代写 22.1×14.8cm

蓬左文庫は、蔵書点検のため、下記のように休館させていただきます。

期間 平成10年6月16日(火)～6月28日(日)

名古屋市蓬左文庫

〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地

☎(052) 9 3 5 - 2 1 7 3

◆交通

名古屋駅、栄より
市バス(基幹バス2番)・名鉄バス(「本地ヶ原方面」行)
「新出来」下車、徒歩5分
大曽根より
JR 中央線「大曽根」下車、南口より徒歩10分

開館時間 午前9時30分～午後5時
休館日 毎月曜日、第3金曜日
祝日(日曜、月曜のいずれかに重なる場合は、日曜開館、月、火休館)
特別整理期間(2週間)
年末年始(12月28日～1月4日)

閲覧 館内のみ。館外貸し出しはいたしません。

閲覧時間 閉架図書 午前9時30分～12時
午後1時～5時
開架図書 午前9時30分～午後5時

複写サービス 保存上支障のないものについて、マイクロフィルム複写などの方法により行ないます。

電話・郵便による申込みも可。

取扱い時間 午前9時30分～12時 午後1時～5時
展示 所蔵資料のうち30件程度を随時展示。テーマ、期間、回数は、年度により異なります。

「蓬左」第58号 ☆平成10年4月18日発行 ☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫(東区徳川町1001番地)

☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷：菱源印刷工業(株)